



「いのちをまもり、医療をまもる」国民プロジェクト宣言！

国民にあまり知られていない「上手な医療のかかり方」。国はこれを広めるため、2018年10月から懇談会を開催しています。

多彩な構成員が意見交換 議論の様子をネット配信

2018年12月17日、厚生労働省に報道陣や一般の傍聴人が多く詰めかけました。この日は、10月から始まった「上手な医療のかかり方を広めるための懇談会」の第5回会合。構成員から提案がなされるといこうとで、注目されていたのです。

同懇談会には、医師をはじめとした医療従事者などの過度な負担を軽減し、医療の質・安全を確保する目的があります。もし医療の質・安全が保たれなければ、患者やその家族の健康は脅かされてしまうからです。

とはいえ、上手な医療のかかり方を広めるのは、簡単なことではありません。そこで、さまざまな視点から方策を検討するため、同懇談会には多種多様な分野から構成員が集められました。アーティシストのデーモン閣下、コミュニケーションデザイナーなどを手がける佐藤尚之さん(株

式会社ツナグ代表取締役)、マスコミからはBuzzFeed Japan News Editorの岩永直子さん、がんサバイバーである鈴木美穂さん(認定NPO法人マギーズ東京共同代表理事)など、多彩な顔ぶれです(座長は、東京大学大学院医学系研究科国際保健政策学教室の渋谷健司教授)。

また、第1回会合で出た「議論の様子を動画で公開すべき」との指摘を踏まえ、第2回からは懇談会の全模様をインターネットで配信。SNS上ではハッシュタグ「#上手な医療のかかり方」を設定し、多くの人の意見を反映しやすい仕組みづくりも進めました。ここでは、「閣下も加わっている!」という驚きの声から、「#上手な医療のかかり方 おお!これ知りたいし勉強したいなあ...!」という期待感を込めた声まで、さまざまな意見が寄せられています。

国民が総力戦で 今すぐできることから着手

第2回会合では、東京女子医科大

学東医療センター救命救急センターの赤星昂己さんが医師の立場から、現状を説明。「若手医師や救急医は人の命を助けたいと思って医師になったが、睡眠時間がまったくとれないこともあり、無意識に集中力が低下していることがあるかもしれない」という話に、衝撃を受ける構成員もいました。

そうした経緯を経て、今回の会合で提案されたのが、前ページの「いのちをまもり、医療をまもる」国民プロジェクト宣言!です。これは、「病院・診療所にかかるすべての国民」と、「国民の健康を守るために日夜力を尽くす医師・医療従事者」のために、「いのちをまもり、医療をまもる」ための5つの方策を実施するというものです。

そのうえで、国民が総力戦で取り組む必要性を強調し、市民・行政・医師/医療提供者・民間企業のそれぞれが今すぐできるアクション例を示しています。

渋谷さんは、「構成員は5つの方

策について、来年度以降も継続的にコミットし、進捗状況をチェックし続ける」と宣言。株式会社ワーク・ライフバランス代表取締役社長の小室淑恵さんは、「仕事を休めないと思います。休みをとれるようにする、民間企業のアクションも大切」と指摘しました。デーモン閣下も、「懇談会は今日が最終回ですが、ゴールではなくスタート」と、宣言をもとにさらに取り組みを推進していくことを呼びかけました。



患者、マスコミ、行政などさまざまな立場から活発に意見が出された